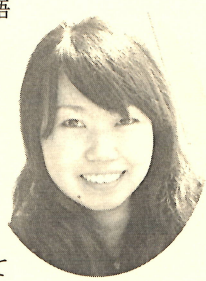
研究の窓

生まれる国は選べない

三浦　純子

「黄色い太陽なんて変だよ、太陽は赤いんだ」と転入したばかりの幼稚園で同級生に言われた。父親の転勤で、生まれたイギリスで５歳まで暮らし、帰国した時の話である。イギリスでは太陽を黄色で描くことが当たり前で、日本では赤やオレンジで色をつけることが「ふつう」なようだ。その後、再び小学校５年生から高校１年生までの５年間をイタリアのミラノで過ごすことになった。留学を含めて、12年ほど海外生活を送ったがその時々で文化の違いや価値観、感覚の違いなどを感じてきた。その時々での「あたりまえ」や「常識」に戸惑い、問い直す人生を送ってきたように思う。異文化の壁を困難に感じたり、楽しんだりと心の動きを体験した。考えすぎと言われることもあったが「ふつう」を問うことができる学問、文化人類学（英国では社会人類学）に出会ってからは、価値観の違いや文化の差異について存分に考えることができるようになり、救われている。欧州の生活では、多くの移民に出会った。イタリアには、物売りをするアフリカの人、家事労働をするフィリピン人、信号機で車を待ち構えて窓拭きの仕事をするマグリブ諸国（北アフリカ）の若者、東からの難民など様々な人がいた。フィリピン人の友人は23歳でイタリアに移住、白血病になった娘や家族のために生活を切り詰めて、お給料の大半を母国に送金していた。家族について尋ねると、涙を流して母国の現状を訴える。華やかなイメージのイタリアだったが、そうした人々を目の当たりにし、同じ場所に暮らしながらこんなにも違う生活をしている人がいる、それは地球全体を表しているように感じた。自分が生まれた国、置かれた立場はあたりまえではないことに気がついた。大学時代には広い視野を身につけたいとアラビア語を履修し、チュニジアへ短期留学した。国際協力のゼミに所属し、ヴェトナム、カンボジアやタイの農村部を訪ねた。ロンドンの大学院では開発と人類学、移民について学び、イタリアでのフィールド調査をもとにフィリピン移民について論文を執筆。帰国後は、大学の難民移民についての研究センターで勤務し、与えられた役割の中で日本の難民政策、難民問題に関心と研究対象が移っていった。移動する人々の幸せを願うという点で研究内容は一貫している。



現在は、タイの難民キャンプに長期間滞留しているミャンマー難民とその人々の経路、日本の難民政策について研究している。タイとミャンマーの国境沿いには1984年から難民キャンプがあり、40年近く経過した今でもおよそ９万人が滞留している。働くことは禁じられ、キャンプの中で暮らすしかない。難民問題の解決策は自主帰還、庇護国への社会統合、そして第三国定住の３つといわれる。ミャンマーの民主化の動きで、自主帰還が期待されたこともあったが、それも今は再び難しい状況だ。タイ政府は難民を認めていないため、社会統合も難しい。そうなると、第三国定住が解決策となるのだが、第三国定住によって全て解決となるのかというとそうでもないようだ。フィールド調査により、難民自身の「人」としての複雑な心境と状況が浮かび上がってきた。誰もが欲するキャンプから脱出できるチャンス。そのチャンスを捨てる人、移住先からキャンプに戻る

人。キャンプの外と中に暮らさざるを得ない夫婦。「解決」のための支援が、実は難民を不自由にしているという一面もあるかもしれない。難民の想定外と思われる行動を文化人類学の枠組みで説明することはできないか。難民の人としての「あたりまえ」の行動を分析することで、彼らを「支援」のプレッシャーから解放したい。その結果として、難民が個性を生かし、自立へ導かれるような研究を継続していきたい。

今年度から神奈川大学・法学部の Global Perspective Program（GPP）の特任講師として教育現場に立つ機会をいただいている。異なる世代の学生たちの新鮮な発想に刺激を受け、勉強させてもらっているのは私自身である。学生には大きく世界に羽ばたいてほしい、海外に興味を持ってほしいという気持ちが強い。なぜならば、自分と違う価値観と１番触れることができるのは、自国から離れた時だから。国内にいても、異文化に触れれば、そこに驚きと学びがある。自分の文化の良さを知り、自分の置かれた環境を見つめ直すことができる。自分が広い世界の一部であることを知ることで得られる学びは大きい。自分のことを理解してほしいという気持ちと同じように、相手のことも理解してほしい。そうした小さな優しさが国際交流、多文化共生や国際協力につながっていく。移民や難民のためになる研究をしたいと思いつつ、実際には苦難に負けず力強く生きる力、彼らの姿に勇気をもらっているのは私の方だ。学生には自分の「あたりまえ」を常に問い、相手を理解する力を育んでほしい。そして自分自身の能力と個性に気づき、生きる力にしてほしい。そんな力を引き出せるような教員を目指したい。

（法学部特任講師）

（筆者撮影：タイのウンピアム難民キャンプ）